

31

経絡治療の普及活動について

周防 一平, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【諸言】

経絡治療は、昭和10年代に岡部素道、井上恵理ら柳谷素霊一門の若手によって考案、体系化された針灸治療法である。この新たに創造された針灸治療法は、当時行われていた「経穴的治療（いわゆる刺激バリ）」に対し、古典に基づいた「経絡的治療（後に経絡治療）」として広まっていくこととなる。この経絡治療初期にあたる戦前期の普及活動は竹山晋一郎に依るところが大きい。その活動の中心として1939（昭和14）年3月3日、柳谷一門の若手を中心とした新人弥生会を結成。結成時の会員は、柳谷素霊、岡部素道、井上恵理、近喰原民、合葉仁、小椋章道、末岡孝、中島無得、吉森三樹、谷田部康之、戸部宗七郎、西澤生恵、岡田明祐、世話人竹山晋一郎、町田昌彦。その後、竹山の戦略に従い『東邦医学』や東邦医学講習会を通じ普及活動は展開された。本研究では『東邦医学』に掲載された新人弥生会会員の論文を通して、竹山の普及戦略について考察する。

【方法】

新人弥生会結成後、第6巻4号（1939年4月号）から最終巻となる第11巻3号（1944年3月号）まで『東邦医学』に掲載された新人弥生会結成時会員の記事を抽出し、その内容の調査、検討を行った。ただし柳谷素霊については、他の新人弥生会会員の師匠筋にあたり立場が異なっていたため、調査対象から除外することとした。

【結果】

掲載記事数は岡部素道19本、井上恵理15本、近喰原民1本、合葉仁1本、小椋章道4本、戸部宗七郎5本、西澤生恵4本、岡田明祐6本の計55本。内容は、治験例、時事論評、経絡治療理論に関するものなどであった。記事内容と発表時期を照らし合わせていくと、第7巻4号（1940年4月号）まではほとんどが治験例で、第7巻5号（同5月号）「硬結の経絡的研究」（岡部）に至り治験例ではなく、経絡を中心とした針灸理論の一端が発表された。続いて第7巻11号（同11月号）では経絡的治療入門特集として「臨床時に於ける脈診と経絡の関係に於いて」（岡部）、「陰陽五行の臨床応用に就いて」（西澤）が掲載された。両者とも同年7月に開催された東邦医学社主催第四回夏期講習会での講義をまとめ直したものである。これ以降は、時事論評なども含まれるが、岡部・井上が経絡治療理論を、その他の弥生会会員が治験例を中心として発表していった。

【考察】

調査結果より竹山の普及戦略について以下の2点が考えられる。

①いきなり経絡的治療の理論を発表するのではなく、治験例から発表することにより、その基礎となる理論への興味・関心を惹きつけた上で、経絡的治療を打ち出すという手順を踏むことで、より多くの臨床家への普及を図った。

経絡的治療が全面的に打ち出されたのは前述の第四回夏期講習会である。このとき、弥生会会員を夜間実地講習の講師として起用するにあたり、1年以上前から治験例を発表させ、予め名を売っておく、という意図もあったであろう。

②岡部素道、井上恵理の二者を経絡治療の代表者として世間に認知させることにより、普及・研究活動の中心的役割を担わせようとした。

これは東邦医学会改組再建の際、岡部、井上にそれぞれ東日本部会において、前者は研究部長、後者は教育部長を任命し、研究部においても第一部岡部主任、第二部井上主任としたことからもうかがわれる。

【結語】

経絡治療初期の普及活動の一端が明らかとなった。